様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ７ 月　 ８ 日現在

機関番号：３２６７３
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｈ０３７１５

研究課題名（和文）ケアラーのQOLに焦点をあてた多面的なケアの質評価に基づく包括的ケアモデルの構築

研究課題名（英文）Building comprehensive care model based on evaluation of quality of care focusing Carers' QOL

研究代表者
山口　麻衣（Yamaguchi, Mai）

ルーテル学院大学・総合人間学部・教授

研究者番号：３０４２５３４２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　7,600,000円

研究成果の概要（和文）：1)日本語版社会的ケアQOL尺度(ASCOT Carer)を開発し、尺度としての妥当性と信頼性を確認し、実践での活用可能性を示したこと、2)ケアラーのQOLの視点からの包括的なケアラー支援実践モデルを提示し、実践ツール(セルフアセスメント、ケアラーアセスメント、ケアラー支援計画表)を開発したこと、3)量的・質的調査により、多様なケアラー特に就労ケアラーのQOLとその関連要因や思い、ケアラー支援の困難性を把握したこと、4)ケアラーのQOLに焦点をあてた多面的なケアの質の評価に基づく、ケアラーとケアが必要な人への支援を両輪とする包括的ケアモデルの論点を整理し、検討したことが本研究の成果である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
我が国でケアラー研究やケアラー支援実践方法の開発と研究が少ない中、日本語版社会的ケアQOL尺度を開発し、ケアラーのQOLと関連要因を明らかにしたこと、就労ケアラーに関して職場関連要因も含めて分析したこと、ケアラーの視点からの包括モデルの検討によりケアの質の研究に新たな知見を提示したことは、学術的意義がある。また、多くのケアラーと支援者の参加により実践に活用しうる包括的なケアラー支援モデルとツールを開発したこと、海外のケアラー支援のよい実践について伝え、ケアラーズカフェの実践モデルを示したことは、ケアラー支援の必要性に関する認識を高めることにつながり、社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：The purpose of our research was to build comprehensive care model based on evaluation of quality of care focusing on Carers' QOL. The main findings of our research were as follows: 1) to develop the Japanese-version of the Adult Social Care Outcomes Toolkit for Carers (ASCOT-Carer) and confirm the validity and credibility of the scale, and to show the availability of the scale for practice, 2) to develop the comprehensive carer support model and the practical tools (self-assessment sheet, carer assessment sheet, and carer support plan sheet) from Carers' QOL perspectives, 3) to analyze and grasp carers' QOL and the related factors, thoughts and difficulties of various carers, especially working carers, by conducting the multi-aspect qualitative and quantitative research several times, and 4) to discuss the comprehensive care model, in which support for both carers and the care-needed is inseparable, based on evaluation of quality of care focusing on Carers' QOL.

研究分野：社会福祉学、社会老年学

キーワード：介護者（ケアラー）　QOL　介護者支援　ケア　高齢者介護　日本語版ケアラーQOL尺度　包括的ケアモデル　ケアの質

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1)地域居住要介護高齢者の増加に伴いケアラーも増加し、ケアの重度化・複雑化・長期化、ケアラーの高齢化、就労ケアラーの増加などにより、介護負担や介護虐待の増加が社会的問題となっている。介護離職ゼロ施策はあるものの、わが国のケアラー支援は法的にも未整備で制度化されておらず、ケアラーが生活者であり、支援対象者だという認識が乏しい。社会的問題解決のためにも、ケアラー支援とケアが必要な人への支援を両輪とする包括的ケアモデルの可能性を高齢者介護に限定せずに検討することが喫緊の課題といえる。

(2)主に欧米諸国ではケアラー法の制定やケアラーを対象とした支援が制度化されている。例えば英国の 2014 年ケア法ではウェルビーイングやホールファミリーアプローチが中心的概念として用いられ、ケアラーのアセスメント権と支援の保障が明記された。また、英国では自治体の社会的ケアのアウトカム指標の一つにケアラー自身の社会的ケア関連 QOL も含まれ、要介護者とケアラー双方への支援効果を評価している。わが国ではケアラーの QOL や関連要因の研究は乏しく、ケアラー対象のアセスメントは制度化されていない。ケアの質の評価についてもケアラー対象の指標については議論がほとんどない。ケアラーはケアの質を高めるためのケア資源(インプット)でもあり、支援対象(アウトカム)でもあるという視点が欠如している。ケアラーを排除せずに包摂してケアラーの位置づけを捉え直し、ケアラーに関わる利害関係者の認識を踏まえた、多面的なケアの質の評価に基づく包括的ケアモデル構築の研究が社会的要請といえる。

２．研究の目的

本研究の目的は、ケアラー(家族などの無償の介護者)の生活の質(QOL)に焦点をあて、多面的なケアの質の評価に基づく包括的ケアモデルを、学際的アプローチにより検討することである。以下の４点を明らかにすることを目的とした。

(1)QOL に焦点をあてたケアラーアセスメント活用モデルを開発するためにケアラー用日本語版社会的ケア関連 QOL 尺度を開発する。

(2)ケアラー調査を実施し、ケアラーの QOL と他の関連要因(特に支援状況・就労・健康等)を明らかにする。

(3)多面的なケアの質の評価に関する理論的検討とともにケアラー支援者・利害関係者の多面的なケアの質に関する認識を分析する。

(4)ケアラーの QOL を高める支援施策・good practice の国内外比較分析を踏まえ、多面的なケアの質の評価について検討し、同評価に基づく包括的ケアモデル構築について検討する。

３．研究の方法

学際的アプローチによるミックス法適用のアクションリサーチの手法を援用し、ケアラーや支援者などの参加・協力を得ながら、以下の方法で文献研究や量的・質的調査を実施した。研究代表者の所属組織での研究倫理の承認を受けた。

(1)ケアラー用日本語版社会的ケア関連 QOL 尺度(ASCOT-Carer)の開発

英国 Kent 大学が開発した The Adult Social Care Outcomes Toolkit for Carers (ASCOT-Carer)尺度(自記式)を、同大学・翻訳会社と協働してバックトランスレーションなど適切な方法で翻訳し、日本語版 ASCOT-Carer 尺度の表現の妥当性の把握(Cognitive Briefing)をケアラー5 名に実施した後、最終版を確定した。その後、開発版の信頼性・妥当性と関連要因を把握した。

(2)ケアラーの QOL と他の関連要因に関するケアラー調査

①就労ケアラーや障がいの子の親を含む多様なケアラーの半構造的インタビュー

ケアラー12 名に半構造的インタビューを実施した(2016.12-2017.2)。12 名のうちの障がいの子の親ケアラー2 名を対象に、追加インタビューを実施した(2019.10-11)。

②ケアラーQOL 調査(Web 量的調査)

要介護 4・5 の人のケアラー300 名(うち就労中 150 名)を対象に Web 調査を実施し、日本語版 ASCOT-Carer 尺度及び健康・就労状況などの関連項目を測定した(2017.2)。

③就労ケアラー調査

要支援１-要介護５の人の就労ケアラー600 人に WEB 量的調査を実施し、日本語版 ASCOT-Carer 尺度及びケア内容、健康、就労状況、離職意図などを把握した(2018.3)。

(3)多面的なケアの質の評価に関する理論的検討とケアラー支援者・利害関係者の認識分析

①多面的なケアの質の評価に関する理論的検討

文献調査や実証調査結果を踏まえた理論的検討を行った。

②ケアラー支援者の個別インタビュー調査

支援者 5 名(うちケアラー兼支援者 4 名)に半構造的インタビューを実施した(2017,1-2)。

③企業人事担当者の半構造化インタビュー

4 社の人事担当者に就労ケアラーの状況や組織として行っている介護離職軽減策などについ

て、半構造的インタビューを実施した(2017.9)。
④地域包括支援センター職員対象の介護者支援に関する質問紙調査
A 県の地域包括支援センター職員対象に、介護者支援に関する集合量的調査を 3 回実施した(2017-2019, 有効N：2017 年 365 名, 2018 年 250 名、2019 年 228 名)。虐待・非虐待事例のケアラー支援の困難性や、ケアラー支援に必要な対人援助者のコンピテンスを把握した。

(4)good practice 比較分析と多面的なケアの質の評価に基づく包括的ケアモデル構築の検討
①ケアラーズカフェ/ワークショップ実践モデル開発の取組み
都内 A 高齢者施設の地域交流スペースにてケアラーズカフェ/ワークショップの実践モデル開発のアクションリサーチを実施した(月 1 回開催,2019.1-2020.3)。地域の支えあいとケアする人のケアに関する集団質問紙調査を地域住民等 48 名(うち 17 名ケアラー)に実施した(2019.11)。
②海外のケアラー支援に関するよい実践(good practice)比較分析
海外組織の HP からの情報収集の他、豪州(2017.10)で開催された国際ケアラー会議に参加し、各国のケアラー支援情報を得た。台湾の国際セミナーで、日本の介護離職ゼロの取組みを招聘を受けて報告し、台湾の状況を把握した(2017.12)。台湾(2018.7)と香港(2018.10)の研究者を招聘し、家族介護とケアラー支援に関する国際セミナーを開催した。また、英国(2018.5)と仏国(2019.3)のケアラー支援実践の現地訪問調査を実施し、海外のよい実践方法を把握した。
③多面的なケアの質の評価に基づく包括的ケアモデル構築の検討
実践参加型の開発・評価の方法を用い、4 都道府県のケアラー支援組織やケアマネ事業所などの協力を得て、開発したツールの縦断(同一の人への 2 回を基本に)調査の実施と評価を行った。
第 1 段階は初期バージョンのケアラーアセスメントシート、セルフアセスメントシートの開発(2016.4-2018.12)、第 2 段階は、改良版アセスメントシートの第 1 回調査の実施と評価(2019.1-3,68 事例)・修正版アセスメントシート・ケアラー支援計画表の開発、第 3 段階は修正版ツールを用いた第 2 回調査の実施と評価(2020.1-2,60 事例うち 21 事例が継続事例)、第 4 段階は、最終版のツールを開発と評価(2020.3)であった。ケアラーは高齢者をケアする人が中心で、ケアの必要な子をケアする人は 4 名で、2 回あわせて 108 名のケアラーが参加した。評価者はケアラーとケアマネジャーやケアラー支援組織の支援者などである。このほか、A 県地域包括支援センターの介護者支援セミナーでツールを演習で活用し、評価を得た。
包括的なケアラー支援モデルや、これまでのケアラーや支援者調査、文献レビュー、現地調査をもとに、多面的なケアの質の評価に基づく包括的ケアモデル構築の検討を行った。

４．研究成果

(1)ケアラー用日本語版社会的ケア関連 QOL 尺度(ASCOT-Carer)の開発
日本語版ケアラー用社会的ケア QOL 度(ASCOT-Carer)を開発した。同尺度は、①大切なことや楽しめることをして時間を過ごすこと、②日々の生活へのコントロール、③セルフケア、④ケア役割における安全、⑤社会参加、⑥自分らしくいられる余裕、⑦支援や励ましを受けているという思いの 7 項目を 4 件法で把握する尺度である。同尺度の信頼性・妥当性を確認し、日本語版も英語版と同様に 1 因子で、内容も理解されることがわかった。最終版はケント大学の HP(https://www.pssru.ac.uk/ascot/)で公開され、同大学許諾を得て、実践で活用できる。

(2)ケアラーの QOL と他の関連要因に関するケアラー調査
①就労ケアラーや障がいの子の親を含む多様なケアラーの半構造的インタビュー
地域包括ケアのもとでのケアラーの困難は、(1)予期せぬ金銭的負担、(2)認知症の人を介護するケアラーの先の見えない困難、(3)働くケアラーの予測不可能な不安の 3 つに分類できた。就労ケアラーの隠れ介護の状況や、障がいの子の親の困難さや親亡きあとの思いも語られた。
②ケアラーQOL 調査(Web 量的調査)
ケアラーのウェルビーイングに関連する指標として、社会的ケア QOL (ASCOT-Carer), 幸福感、生活満足度を把握し、関連を確認した。ASCOT Carer 尺度の信頼性(信頼係数 α=.846)などから、尺度の有効性が確認できた。ケアラーは、将来への不安や、孤独感も感じており、健康や心理面、経済状況など、包括的に把握し、QOL との関連を把握する重要性が示された。
③就労ケアラー調査
ASCOT Carer 尺度の信頼性(α=.880)などから、要介護度の低い場合のケアでも尺度の有効性が確認できた。2 割弱が孤立・孤独を感じ、1 割が友人や家族などの相談相手がいないと回答し、6 割強が今後のケアに不安を感じていた。全体の 1 割強が介護離職、約 4 割が時短の経験があった。また、職場でのケアに関して相談する部署の機能が未充足であることもわかった。

(3)多面的なケアの質の評価に関する理論的検討とケアラー支援者・利害関係者の認識分析
①多面的なケアの質の評価に関する理論的検討
国内外の文献レビューと本研究での調査結果から理論的検討を行い、海外ではケアラー支援は要介護者支援とともに重要な政策の一つであること、ケアラーの QOL やウェルビーイングの向上が政策・実践面で重要であり、ケアの向上の要素となること、英国では自治体がケアラーアセスメントの判断基準を定め、支援対象を認定し、支援を実施する体制であることを確認した。

②ケアラー支援者の個別インタビュー調査
　ケアラー自身が支援者として地域を限定せずに行う実践や、ウェルビーイングなまちづくりに取り組むなかでのケアラーを包摂した実践について理解を深めた。きょうだいケアラー、精神疾患のある家族のケアラーなど、特に障がいのある人のケアラー支援の必要性が語られた。
③企業人事担当者の半構造化インタビュー
　就労ケアラーの問題は顕在化されていない面もあるが、迷惑をかけたくないという思いから一人で介護の問題を抱えて仕事をしている「隠れ介護」の存在がいる可能性が語られていた。職場の雰囲気や制度の利用しやすさなども考慮すべき点であることがわかった。
④地域包括支援センター職員対象の介護者支援に関する質問紙調査
　地域包括支援センターにおける高齢者虐待防止の実践や総合相談などで、複合問題をかかえる家族のなかでのケアラー支援、精神疾患のあるケアラーへの支援など、複雑で多様なケアラー支援の困難さを感じながらも、ケアラー支援実践を根気よくきめ細やかな対応をしていることがわかった。ケアラー支援に必要な対人援助者のコンピテンスについては、支援の工夫やアセスメントに基づく支援はできていないという回答や困難を感じるという回答が多い傾向であった。

(4)good practice 比較分析と多面的なケアの質の評価に基づく包括的ケアモデル構築の検討
①ケアラーズカフェ/ワークショップ実践モデル開発の取組み
　ケアラーズカフェ/ワークショップ実践は、ケアラーへの周知などの課題はあるが、交流カフェの他の支援者の協力が得られ、多様な連携による開かれたケアラー支援の可能性が示唆された。ワークショップはケアラー本人の語りや、運動や、海外のケアラー支援を学ぶプログラムなど、ケアラーやケアラー支援に関心のある人にあった多彩なプログラムを開発・実践できた。
　地域での質問紙調査では、ケアラーが地域で孤立しない取組みや、認知症の理解の深まりの必要性などがわかり、地域でケアする人をケアする支えあいや地域づくりの可能性が示唆された。
②海外のケアラー支援に関する good practice 比較分析
　豪州のケアラー支援国家戦略に基づく実践(デジタル対応など)、台湾・香港のケアラーズカフェや外国人住み込みケアワーカーの状況、英国のケアラー支援センターの実践(自治体とのケアラーアセスメントの連携・電子化、ヤングケアラー支援など)、仏国の専門家によるケアラーズカフェ実践と研修プログラムなど、海外のよい実践方法を把握し、比較分析した。
③多面的なケアの質の評価に基づく包括的ケアモデル構築の検討
【第 1 回、第 2 回のケアラーと支援者によるツール活用実践調査とその評価】
　ケアラーと支援者のツールに関する評価では、ケアラーの約 7-8 割、支援者の 8-9 割が、「生活への思い」を伝えられた/把握できた(だいたいを含む)と回答した。自由回答で、ケアラーからは「自分の時間がないことに気が付いた」、支援者は「ケアラーのことを考えるきっかけになった」との意見もあったが、「量が多い」、「わかりにくい」、「重複がある」などの指摘もあった。
　第 2 回調査時の、ケアラー支援が必要な程度に関するアセスメント・評価として、「支援は必要ない（対象外)」は 17%、「支援がやや必要」は 50%、「支援が必要」は 27%、「支援が大いに必要」は 7%であった。実際のサービスが限定的な中でのアセスメント判断は難しい面があったが、アセスメントで把握したケアラーの多様な状況をもとに支援者が判断することができた点で必要事項を含めたセルフ/ケアラーアセスメントのツールとなったといえる。ケアラー支援計画については、制度化されていない中で実際に実践するには困難があるものの、ケアラー本人に対する支援目標や内容を支援者が具体的に記入でき、ツール活用の有効性が確認できた。
【最終版の包括的ケアラー支援モデル】
　上記の評価をもとに、ケアラー及び支援者にとってのツールの利便性を考慮して改善した。最終版は、ケアラー自身によるツールは表紙の説明 1 頁、セルフアセスメントシート 4 頁で、付随ツールとして ASCOT Carer 尺度(7 問 3 頁)を含めた。支援者向けのツールは、支援プロセスの説明(1 頁)、ケアラーアセスメント(第 1 段階(3 頁)、第 2 段階(1 頁)、ケアラー支援計画表(1 頁)とした。最終版は、ケアラーからは意図が伝わった、支援者からは使いやすくなったとのコメントを得たが、QOL や思いの把握の難しさに関する指摘もあった。

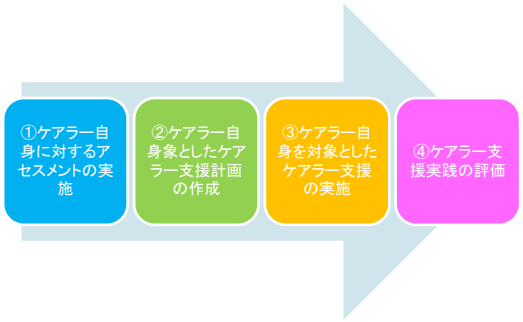

図 1　包括的なケアラー支援プロセスモデル

　最終版の特徴は 3 点あげられる。第一に、「包括的なケアラー支援プロセスモデル」として、①ケアラー自身に対するアセスメントの実施、②ケアラー自身を対象としたケアラー支援計画の作成、③ケアラー自身を対象としたケアラー支援の実施、④ケアラー支援実践の評価のプロセスを示したうえで、アセスメントを軸とした包括的な人生への支援の必要性を明確にした(図 1)。また、支援者の行うアセスメントをケアラーの状況の把握の段階(第 1 段階)と、ケアラーへの支

援の必要性の分析・判断・評価の段階(第 2 段階)に区別して示し、ケアラーアセスメントの目的・内容・実施者・困難性などを整理した。

第二に、ケアラーのウェルビーイングという観点からのアセスメントとした。開発した日本語版社会的 QOL(ASCOT Carer)尺度をセルフアセスメントシートの付随ツールとし、ケアラーアセスメントシートにおいても、ケアラーのウェルビーイングや QOL の視点から判断し、ケアラー支援計画を策定できるようにした。ASCOT Carer 尺度は英国では自治体のアウトカム評価指標として活用されているが、本研究ではケアラー支援実践での活用を試みた。実践調査では、ケアラーも支援者もウェルビーイングや QOL を意識化できたが、概念そのものの伝わりにくさもあり、説明や共通理解を促す工夫が課題として残った。

第三に、アセスメントで重視すべき 4 つの柱と 7 領域を明確にし、セルフアセスメントとケアラーアセスメント間の統一化を図った(図 2)。7 領域は、1)ケアラー自身、2)ケアしている人、3)行っているケア、4)ケアしている人の利用サービス、5)ケアラーの生活、6)ケアラーの経済面の不安、7)ケアラーのウェルビーイング・生活の質である。さらに 7 領域を 4 つの柱(ケアラー自身(1・2)、ケアラーのケア役割(3・4)、ケアラーの生活(5・6)、ケアラーのウェルビーイング(7))として区分し、アセスメントの軸はケアラーであり、ケアが必要な人やサービス情報は付随情報とし、位置づけを明確にした。

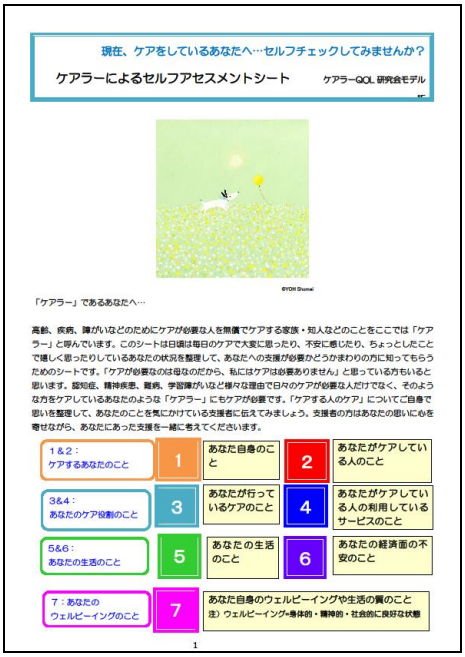

図 2 セルフアセスメントの表紙の説明

【多面的なケアの質の評価に基づく包括的ケアモデル構築】

これまでの実践調査や先行研究をもとに、本研究ではケアラーの QOL の視点から、ケアラーはケアの担い手であり、ケアの受け手でもある二重性を認識したうえで、ケアが必要な人へのケアだけでなく、ケアラーへのケアの質の評価を含む包括的ケアモデルを検討した。本モデルでの検討事項として 6 点あげられる(表 1)。1)ケア概念の重層性：ケアの質の議論に「ケアする人のケア」を含めるには、ケアを要介護者へのケアに限定しない広義な解釈を必要とする。2)ケアラー概念による包摂と限定:高齢者の家族介護者に限定せずに、無償のケアラーとして多様なケアする人を包摂する。但し、制度化してサービス受給資格を付与するには、アセスメントにより認定されるケアラーの限定が必要となる。3)支援対象(クライエント)としてのケアラー：ケアラーとケアする人の双方が支援対象であり、双方の QOL をケアの質の評価のアウトカムとしてとらえる。4)ケアのパートナーとしてのケアラー：ケアラーは介護事業者などとともにケアの担い手としてのパートナーとして位置付けられ、有償・無償のケアワークが相互に関連している。5)生活者としてのケアラー：無償労働としてのケアワークと有償労働(仕事)や他の生活との関連を理解し、ケア役割のケアラーの生活への影響を把握する。6)ケアする人のケアの担い手：地域、職場、ケアラー支援組織など多様な担い手の役割の明確化と連携が求められる。ケアラーの QOL に焦点を当ててケアの質の評価を検討した結果、既存の要介護者本人の健康や介護状況を軸としたケアの質の議論とは異なった視点からケアの質の議論をすることができた。ケアラーの存在を可視化し、ケアが必要な人もケアラーも包摂した包括的なケアのモデルを検討し、論点を示した意義がある。

表 1 包括的ケアモデルの検討事項

1	ケア概念の重層性
2	ケアラー概念による包摂と限定
3	支援対象としてのケアラー
4	ケアのパートナーとしてのケアラー
5	生活者としてのケアラー
6	ケアする人のケアの担い手

(5)今後に向けた課題

今後に向けた課題としては、第一に、障がいのある人のケアラーやヤングケアラーなどの多様なケアラーに適したケアラー支援モデルの検討が十分できず、今後、調査結果をさらに分析したうえで、多様なケアラーを包摂した支援方法をさらに検討すべき点である。

第二に、本研究での最終版のケアラー支援ツールを活用した実践調査と評価を行い、さらに利便性を高めるべき点や、ケアラー支援ツール活用にむけた研修や事例集の開発、電子化などのツールの改善なども課題である。

第三に、多面的なケアの質の評価に基づく、ケアラー支援とケアが必要な人への支援を両輪とする包括的ケアモデルについては、さらなる精緻化にむけた理論面の検討が必要である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 Yamaguchi, M. and Rand, S.	４．巻 3(3)
２．論文標題 Issues and challenges in comparing carers' quality of life in England and Japan: lessons from developing the Japanese version of the ASCOT-Carer	５．発行年 2019年
３．雑誌名 International Journal of Care and Caring	６．最初と最後の頁 459-464
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1332/239788219X15597493546625	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 山口麻衣	４．巻 Vo1.10,No2
２．論文標題 高齢者を介護する家族への支援とソーシャルワーカーに求められるコンピテンス	５．発行年 2019年
３．雑誌名 通所＆施設 地域包括ケアを担うケアマネ＆相談員	６．最初と最後の頁 25－29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山口麻衣	４．巻 第177号
２．論文標題 「人生100年時代」の老々介護の実態	５．発行年 2019年
３．雑誌名 心と社会	６．最初と最後の頁 34－38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山口麻衣	４．巻 52
２．論文標題 地域包括支援センターにおける介護者支援の課題―介護者支援の困難性に焦点をあてて	５．発行年 2019年
３．雑誌名 ルーテル学院研究紀要	６．最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計13件（うち招待講演　1件／うち国際学会　12件）

1．発表者名 Yamaguchi, I, Yamaguchi M., Ohara, M Matsuzawa, A, Nakamura, H, Hirose K. Horikoshi, E,
2．発表標題 Organizational Communication and Support for Avoiding Working Carers ' Leaving their Jobs
3．学会等名 ABC Asia and the Pacific 16th Conference, Wellington, New Zealand（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 Yamaguchi, I, Yamaguchi M
2．発表標題 HRM Support Systems and Interpersonal Support and Communication for Japanese Working Carers to Continue their Jobs in their Companies: Qualitative Analysis with MAXQDA,
3．学会等名 MAXQDA International Conference（国際学会）
4．発表年 2020年

1．発表者名 Yamaguchi, M, Hirose K. Yamaguchi I., Ohara, M Matsuzawa, A, Nakamura, H, Horikoshi, E,
2．発表標題 Development of the Japanese-version of the comprehensive carer assessment model focusing on Wellbeing and Quality of Life of Carers
3．学会等名 Joint World Conference On Social Work Education And Social Development（国際学会）
4．発表年 2020年

1．発表者名 山口麻衣、山口生史、松澤明美、中村裕美、堀越栄子、小原眞知子、Stacey E Rand、Kamilla Razik
2．発表標題 日本語版ケアラー用社会的ケアQOL尺度(ASCOT Carer)の開発-開発のプロセスと課題
3．学会等名 第60回日本老年社会科学会
4．発表年 2018年

１．発表者名 Yamaguchi, M. Yamaguchi, I, Nakamura, H., Rand, S.E., Razik, K., Matsuzawa, A., Ohara, M., & Horikoshi, E
２．発表標題 Wellbeing and Quality of Life of Carers in Japan: Translation and Cross-cultural validation of the Adult Social Care Outcomes Toolkit for Carers,
３．学会等名 the Joint World Conference on Social Work, Education and Social Development 2018（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yamaguchi, M. Yamaguchi, I, Nakamura, H., Rand, S.E., Razik, K., Matsuzawa, A., Ohara, K.Hirose, & Horikoshi, E.
２．発表標題 Quality of Life of Working Carers in Super-aging Japan: An exploratory study on Factors that influence Carer’s QOL
３．学会等名 8th Interdisciplinary Conference of Aging & Society, Tokyo（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yamaguchi, M.
２．発表標題 Supporting Carers of Community-dwelling Frail Older Adults: Hidden Agenda in Long-term Care System in Japan
３．学会等名 GSA2018, Annual Scientific Meeting, Gerontological Society of America,（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Nakamura HT, Yamaguchi M, Yamaguchi I, Matsuzawa A, Ohara M, Rand S, Razik K
２．発表標題 Cross-cultural validation of the Japanese version of Adult Social Care Outcomes Toolkit for Carers : Application for working adults who took care of family members
３．学会等名 8th Interdisciplinary Conference of Aging & Society, Tokyo（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Nakamura HT, Yamaguchi M, Yamaguchi I, Matsuzawa A, Ohara M, Rand S, Razik K
２．発表標題 Cross-cultural validation of the Japanese version of Adult Social Care Outcomes Toolkit for Caregivers (ASCOT-CARER)
３．学会等名 11th Pan-Pacific Conference on Rehabilitation, Hong Kong（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yamaguchi I, & Yamaguchi M
２．発表標題 Organizational Communication and “Kakure-Kaigo” or “Hidden-Care” Problems in Japan
３．学会等名 Association for Business Communication 83rd Annual Conference Miami, Florida, USA（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 小原眞知子・山口麻衣
２．発表標題 日本の社会福祉の現在と未来：家族介護者を支える政策の必要性
３．学会等名 第5回韓日米中国際社会福祉フォーラム,ソウル女性プラザ国際会議場,韓国（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Mai Yamaguchi, Akemi Matsuzawa, Eiko Horikoshi, Ikushi Yamaguchi, Machiko Ohara, Hiromi Nakamura
２．発表標題 Carers' Unforeseen Uncertainty in “Integrated Community Care System” in Japan: Findings from Voices of carers.
３．学会等名 7th Carers International Conference（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 山口麻衣
２．発表標題 「日本における「介護離職ゼロ」の取り組みの現状と課題：ケアラー支援の視点から」
３．学会等名 中華民國家庭照顧者關懷總會国際セミナー（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	山口　生史 (Yamaguchi Ikushi) (50257127)	明治大学・情報コミュニケーション学部・専任教授 (32682)	
研究分担者	小原　眞知子 (Ohara Machiko) (50330791)	日本社会事業大学・社会福祉学部・教授 (32668)	
研究分担者	中村　裕美 (Nakamura Hiromi) (20444937)	埼玉県立大学・保健医療福祉学部・教授 (22401)	
研究分担者	松澤　明美 (Matsuzawa Akemi) (20382822)	茨城キリスト教大学・看護学部・准教授 (32101)	
研究分担者	廣瀬　圭子 (Hirose Keiko) (90573155)	ルーテル学院大学・総合人間学部・講師 (32673)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
連携研究者	堀越　栄子 (Horikoshi Eiko) (70060720)	日本女子大学・家政学部・名誉教授 (32670)	